

大学で身につけるべき力

浜崎 桂子

2011年、全学共通カリキュラムの言語関連科目については、英語ディスカッションの授業、また、英語および言語Bにおける副専攻の導入など、新しいステージが本格的に始動した。少人数授業、各授業の達成目標の明確化や多様なレベル設定など、社会や学生のニーズにこたえる言語教育の実践に向けて、各言語教育研究室、英語ディスカッション教育センターは、コース作成、教材や授業内容の吟味など、鋭意努力を続けている。成果を語るには時期尚早だが、アンケート等からは、学生の学習意欲が高まり、成果を実感している学生も多い様子がうかがえる。

社会における大学教育の役割は、大綱化、大学進学率の増加、経済システムのグローバル化等をうけて、ここ20年の間に大きく変化してきた。なかでも「実践的な言語運用能力」の養成を求める声は、有名企業における「英語公用化」の導入等もあってますます高まっている。就職活動のために検定試験での高スコアを目指す学生たちは、そういった社会の要請に敏感に反応しているといえる。

このような期待にこたえ、卒業後、社会で活躍するべき学生たちのスキルを大きく伸ばすことが、大学の使命の一つであることは言を俟たない。一方、狭義での「語学力」はナマモノであり自ら磨き続けなければ腐る。4年間の大学教育で一定の語学力が身につけられたとしても、その品質保証期間は実はかなり短いのである。おそらくこのことは、多かれ少なかれ他の知の分野にもあてはまるだろう。一方、学生たちの卒業後の人生は長く、また、彼らが出ていく今後の社会の変化はますます見えにくい。そのような中で、大学が学生に提供すべきは、出口におけるスキルや知識の量の保証だけではなく、今後も大きく変化する社会で生き抜くための「知的な体力」であろう。自ら、状況を分析し、問題を発見し、必要な情報を収集しながら思考する力を、授業内外の学びを通して、どのように大学時代に身につけるか、そして大学が、それをどう支援するかが問われている。今号の特集「学習支援を考える」は、全カリにおける学習支援の試みの一端を紹介するものである。さらなる議論の端緒を開くものとなることを願いたい。

はまざき けいこ

(本学異文化コミュニケーション学部准教授/
全学共通カリキュラム運営センター広報委員
ドイツ語教育研究室主任)